日ポ・サロン会報

日ポ・サロン会報　第16号
発行日　平成28年3月20日
事務局　日ポ・サロン
〒595-0041 泉大津市戎町6－10
TEL.0725-32-6328
FAX.0725-31-3747
E-mail:donkawai@pearl.ocn.ne.jp

クラコフ旧市街

「祝・ワルシャワ大学日本学科独立60周年」

ＮＰＯ法人　日ポ・サロン　理事長
高　島　和　子

志を同じくする４人で日ポ・サロンを立ち上げ今年９月で１７年目を迎え、読み応えある会報第１６号をお届けします。お忙しい中ご執筆下さった方々の熱い想いが一杯詰まっています。ご一読下さいませ。

ご存知のようにポーランドは、１７９５年より１２３年間、三国に分割統治され地図から国名が消えていました。自由と独立を目指し多くの犠牲を伴う数多くの困難を乗り越え、１９１８年に独立を果たし、１９１９年、日本はいち早くポーランド国を認め国交を樹立、互いに大使館を設置しました。

そして同年、リヒテル・ボグダン氏が学生を対象に日本語を教え始めます。１９５２年、日本語言語学のコタンスキ博士は日本学専攻の修士課程を教える許可を得て、１９５６年、日本学科が独立し今年は６０周年記念のお祝い年となっています。

日ポ・サロンは会員皆様の温かいご支援のもと、その歴史ある日本学科から昨秋１４人目となる留学生を招聘しました。近隣諸国からは誤った認識に基づく厳しい目を向けられている日本ですが、その日本が大好きだと憧れて、多岐にわたる研究課題を携え留学を希望する学生を支援出来る事の意義深さと尊さを思う時、胸に迫る想いが溢れます。

この活動がポーランドと日本を繋ぐ未来の架け橋に育っている事を信じ、今後とも何卒よろしく末永いお力添えをお願い申し上げてご挨拶と致します。

総会並びに講演会

２０１５年1月３１日(土)
於/ＫＢＳ「桐の間」
会員３４名・留学生３名・委任状：５３名提出

１．理事紹介　新理事長　　高島和子
　　理事　　河合康子・岸本啓子（事務局）
　　澤瀉徹郎（音楽担当）・樋口晴子（書記）
　　田中サヨ子（留学生担当）
　　吉岡久代・牧孝仁（会計）
　　長岡正（会計監査）

２．講演　　入舟梓「感じる力」
　　（神戸大学からワルシャワ大学への交換留学生）

　　木原春香「ワルシャワ大学への留学」
　　（神戸大学からワルシャワ大学への交換留学生）

　　ハリウォ・ヤクブ「自己紹介と感想」

春の遠足

「姫路書寫山圓教寺見学」
（姫路女流作家・柳谷郁子先生ご案内）

２０１５年4月8日（木）
会員１９名　お客様２名　留学生５名

書寫山圓教寺

「書寫山圓教寺をたずねて」

川端佳子

４月８日、思いがけない花冷え気温６～８度。しかも肝心の桜は例年より早く咲き、散り急ぎ、名残りの桜に対して、一際白く浮かび上る姫路城でした。５年振りの化粧直しを済ませた白鷺城が姫路駅の正面向こうに輝いていました。

９時過ぎ駅に着き、まだ早過ぎたかしらと改札口に向かいびっくりしました。まぁ、役員の皆様がニコニコと迎えて下さったのです。この花冷えの中、１時間前から私たち参加者をお待ち頂いていたのです。

３，４人ずつタクシーに分乗、圓教寺に向かいました。姫路城を横目に眺める頃になると、青空が見え出し春らしい光が差し始めました。ケーブルで一気に登り、摩仁殿の前までバスのお迎えがあり、何の苦労もなく着いてしまいました。千年の歴史の古刹、荘厳な伽藍、仏教の聖域の深山に足を踏み入れた途端、ふわ～と暖かい空気を胸一杯吸い込んだ。

山ふところにに包まれた圓教寺境内は風もなく下界よりも暖かく優しい空気に溢れていました。

大樹玄承様のご案内で大講堂や常行堂の内に入れて頂きました。釈迦三尊像、阿弥陀如来様の歴史や由来を、又お堂の建築法をこと細かくご説明頂き本当に興味深く感動いたしました。樹齢１００年の柱、仏像、神宿る樹齢の材木を何年も何十年もかけて捜し求め、この崖っぷちに建てる事の昔の人の叡智と力。礎石の上に乗っているだけの柱との絶妙なバランスの計算。屋根瓦の重みを支える柱と梁のバランスなど。地震国日本において倒壊するより、落雷による火災焼失が殆どだと言う事実に驚きました。火災焼失は木材建築には致命傷ですね。山中での火災は恐怖の一語だと思います。特筆すべきは、国指定重要文化財、大講堂、食堂、常行堂の配置がコの字型になっていて、他の寺では見られないそうです。

圓教寺の歴史については資料を参考にさせて頂きます。先ず驚いたのは性空さんの生い立ちでした。平安中期の９１０年に貴族橘氏の次男として京に生まれました。出家を許されたのが３６歳。橘氏の復権を願う両親は出家を許さなかったのです。比叡山慈恵大師に天台教観を学ぶも大衆教化に生きる聖の道を選ぶ。修験の山霧島山、背振山に２０年余り籠もり修行。９６６年５６～５８歳に更に修行の地を求め書寫山

に入山。草庵を結びます。やがて修行を積んだ上人の徳と名声は都にも届き、花山法皇より圓教寺の寺号を授かり、数々の堂塔が整えられますが、上人はあくまでも信仰と修行の道を生きます。

幼少期、人と交わるより一人遊びが好きだった少年は、名声や華やかな栄達に距離を置き、慎ましい人柄を貫き通し、本当の聖として、ただひたすらに修行の生涯を送られた方でした。こんな上人を慕う人々がひきもきらなかったそうです。「はるばると登れば写寫の山下ろし　松の響きも　御法なるらん」

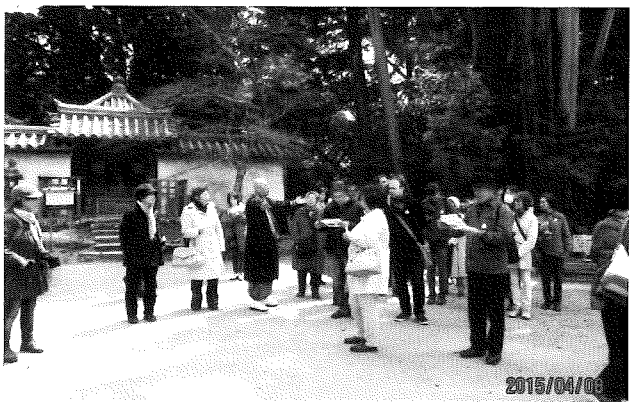
大講堂から湯屋橋までの下り坂の道々、マルチン、ヤヌシュ、ヤクブ君たち留学生が大樹様を囲み熱心に会話が弾み日ポ交流の一場面もありました。

少し遅めの昼食は、柳谷郁子先生のご紹介でレストランＭＩＬＬＥ。目の前に白鷺城を望みながら、柳谷先生監修の「官兵衛天下取り御膳」を美味しく頂きました。

官兵衛に因んだ献立を特別に再現して頂いたそうです。天ぷら盛合せは「官兵衛の采配」、おむすび用出汁は「高松城水攻め」、鯛しゃぶは「官兵衛の洗礼」・・・賤ヶ岳の戦いの後、キリシタンになる。

お料理の献立表には物語の解説がされ、とても楽しく頂きながら、「負の美意識」についてのお話も胸をつかれました。

日本一の素晴らしい姫路城を持つ兵庫を誇りに思いながら充実した一日を提供して下さった理事の皆様にお礼を申し上げます。



「書写山円教寺の感想」

ハリウォ・ヤクブ

ハリウォ・ヤクブと申します。ワルシャワ大学の日本学科の修士２年生で、日ポ・サロンの支援のおかげで、去年の１０月に来日して、今、神戸大学で留学しています。４月８日に日ポ・サロンの方々と一緒に書写山円教寺への遠足に参加しました。

最初に書写山の山頂まで書写山ロープウェイで行きました。ロープウェイに乗っている時、とても美しい姫路の見晴らしが見えました。書写山の山上で桜が咲いていたし、天候も良かったから、春爛漫の雰囲気をよく感じられて、気持ちは非常によくなりました。

そして、バスに乗って書写山円教寺へ行って、お寺で坊さんと会いました。坊さんに円教寺境内の案内やとても面白い説明をして頂きました。日本の伝統的な建築も鑑賞できました。一番素晴らしかったのは、大講堂、食堂、常行堂の３つの堂でした。その上で、普通に入れない堂の中にも入らせて頂きました。そのおかげで、立派で古い仏像を見ることができました。

また、「ラスト・サムライ」という有名なハリウッド映画の場面が書写山円教寺で撮影されたと、坊さんは私たちに教えてくれました。私がその映画を何回か見たのに、そのことを全然わかりませんでした。しかし、円教寺の美しくて、印象的な雰囲気を味わってから、なぜ「ラスト・サムライ」のプロデューサーが、そのお寺を選んだか、よくわかるようになったのです。トム・クルーズと同じ土地に立っていることも、とても面白い経験だったと思います。

円教寺を観光した後で、私たちは書写山を下りて、バスで食事をしに行きました。食事は、姫路城の向こうにあるホテルのレストランでしました。そのおかげで、昼ご飯を食べながら、姫路城の美しい景色を観察できました。特に、咲いている桜の木に囲まれた改修された大天守の真っ白くて華麗な姿は、私にすごく強い印象を与えたのです。また、食事もとても面白かったです。料理が黒田官兵衛の生命の出来事に基づいたからです。私が日本のキリシタンの歴史を研究しているから「かんべいの洗礼」という料理は、私に一番面白かったです。昼ご飯を食べながら、他のポーランド人の留学生と話し合えました。先輩に日本での生活や留学の経験の話をしてもらって、とても嬉しかったです。

日ポ・サロンの方々と一緒に楽しく時間を過ごせて、本当に感謝しています。皆様、誠にありがとうございました。皆様と会う次の機会を楽しみにしています。

ヤクブさん送別会

２０１５年８月１０日(月)
於/ＫＢＳ
会員３１名・留学生６名

「留学を終える頃の感想」

ハリウォ・ヤクブ
(神戸大学国際文化学研究科)

１．自己紹介

私はハリウォ・ヤクブと申します。日ポ・サロンの支援のおかげで、去年の１０月から神戸大学で留学しました。来日する前に、ワルシャワ大学の日本学科で日本語と日本文化を学びました。私の専門分野は、日本キリスト教の歴史で、今、日本文化におけるキリシタンの迫害のイメージについての修士論文を書いています。この発表で、ほぼ１年間の留学に関する感想や行った活動について話したいと思います。

２．研究に関する活動

〈大阪の茨木市〉春休みの時、茨木市の隠れキリシタンの記念館に行きました。記念館では、茨木のキリシタンの歴史についての説明をしてもらって、いくつかのキリシタンの遺物を

見ることもできました。

〈東京の新国立劇場〉６月の下旬に、遠藤周作の『沈黙』に基づいたオペラを観に東京に行きました。オペラはとても面白くて、俳優もオーケストラも本当に上手だったと思います。

〈「異端的宗教活動」についてのシンポジウム〉

７月に京都大学で開催されたシンポジウムに参加しました。そのシンポジウムで隠れキリシタンを研究している先生方の発表を聞くことができました。シンポジウムの後で、先生方と他の学生と一緒に飲み会に行って、ポーランドの民族の宗教的な習慣についてもお話できて本当にうれしかったです。

３．長崎への見学旅行

春休みの終わりに、長崎への４日間の旅行をしました。

〈生月島〉で、島の館という隠れキリシタンと捕鯨に関する博物館に行きました。あそこで隠れキリシタンの家の伝統的な部屋などを見ることができました。案内してもらってから、島の館の中園先生が話をして、私を先ほどお話したシンポジウムに招待してくれました。生月島の旅館に泊まった時、クジラの刺身を初めて食べてみました。

〈平戸〉の隠れキリシタンの記念館と殉教地に行きました。いくつかの明治時代頃の教会も見ることができました。長崎県の古い教会に玄関があると気が付いたて、とてもびっくりしました。

〈島原半島〉へ行った途中で、遠藤周作の記念館に行って、遠藤周作の作品と生涯をもっと詳しく知るようになりました。島原半島では、原城の城跡と日野江城の城跡に行きました。長崎へ行く時、口之津町に寄って、アレッサンドロ・ヴァリニャーノ神父の像を見ました。

〈長崎〉では、日本のキリスト教の歴史に関係がある展示を見に長崎市立博物館へ行きました。翌日、日本２６聖人の記念碑と記念館へ行きました。その旅行はとても面白くて、私の研究に非常に役に立ったと思います。

４．他の旅行

〈大阪〉は神戸に近いから、遊びや観光のためによく行ったりしました。大阪城や難波や国立文楽劇場などに行きました。

〈京都〉にも何回か行きました。金閣寺・伏見稲荷大社・禅林寺など、色々な神社とお寺を見ることができました。日本の伝統的な文化を味わえて、嬉しいです。

〈姫路〉に３回行きました。日ポ・サロンの方々と一緒には書写山円教寺に行って、友達と一緒には姫路城に行きました。その遠足は、全部本当に楽しかったです。

〈伊賀〉５月につれづれ会の方々と一緒に伊賀に行きました。松尾芭蕉の生家、松尾芭蕉の記念館と忍者の博物館に行ってとても面白くて、楽しく時間を過ごしました。

〈東京〉「沈黙」のオペラをきっかけに東京を観光しました。素晴らしい案内のおかげで、一日半で、渋谷、浅草、秋葉原銀座など、東京の代表的な観光地を見られました。

〈神戸〉もちゃんと観光できました。神戸市立博物館･南京町北野町･生田神社等に行きました。そして摩耶山と六甲山に登りました。山頂から見た神戸は本当に美しいと思います。

５．ポーランド語とポーランドの文化を広める活動

登りました。山頂から見た神戸は本当に美しいと思います。

５.ポーランド語とポーランドの文化を広める活動

〈日本ポーランド協会関西センターのポーランド語勉強会〉では、夏期に、半年でポーランド語の勉強に手伝ってあげました。ポーランド語の文法や発音を教えたり、ポーランドの文化日常生活について話したりしました。ポーランド語に興味がある日本人と会うのは、非常に嬉しい経験でした。それだけでなく、日本ポーランド協会関西センターの講演会で私の故郷のオポーレについて発表をしました。

〈ボランティアのポーランド語勉強会〉神戸大学で毎週、今年にワルシャワ大学で留学をしにポーランドへ行く国際文化学部の学生にポーランド語を教えてあげました。ポーランドとワルシャワでの生活についての様々な説明もしてあげました。

６．神戸大学で勉強したこと

《日本語》能力を伸ばすために、神戸大学の留学生センターで、文法・漢字・作文など、様々な日本語の授業を受けました。例えば今学期の作文の授業で、日本語の論文の表現と書き方を身に付けました。

《日本文化表象論特殊講義》では、日本映画に使用された工夫・技術や日本のアニメーションの歴史などを学びました。その上で、授業に参加した学生は、自分の研究テーマに関する映画についての発表をしなければなりませんでした。ですから、私は、「江戸時代のキリシタンと日本の映画」という発表をして、同じテーマについてのレポートを書きました。

《日本言語文化論特殊講義》では、日本の天皇観について勉強しました。古代日本から、第二次世界大戦にかけて、天皇制に関する考え方や意見がどうゆう風に変わっていったかについての知識を広げました。イエズス会の宣教師の天皇制についての授業もあったので、私の研究にも役に立ったと思います。

研究テーマ･日本文化におけるキリシタンの迫害のイメージ

今、日本文化が全世界で流行っている時代に、日本文化の作品にキリシタン時代がどうゆう風に描かれているか、という問題は面白いと思います。ですから、私の研究では、江戸時代頃のキリシタン弾圧に関する小説・アニメ・漫画・映画など、様々な文化作品を分析しています。

そのような作品の場面は、主に島原の乱、それともその後始末です。島原の乱に関係がある作品の中で、大島渚の「天草四郎時貞」（1962年）という映画や「サムライチャンプルー」（2004年）という連続アニメなどを例として挙げられます。

「天草四郎時貞」は、島原の乱の原因と原城の包囲までの天草四郎の活動を表す映画です。天草四郎に関する作品の過半数は、彼の転生の伝説について述べます。しかし、大島渚の映画は、その伝説に反抗して、天草四郎をカリスマ的なのに、平凡なキリシタンとして表すのです。

「サムライチャンプルー」は、江戸時代の文化と現象をヒップホップの文化と交えるテレビアニメです。三人の主人公（ジン・ムゲン・フウ）は、ひまわりの匂いのする侍を探しながら、日本を旅しています。女子のフウは、隠れキリシタンの出身です。そのアニメには、踏絵・キリシタンンの根付・マリア観音など、様々な主題が出てきます。その上で、最後のエピソードの場面は、生月島です。

今後は、キリシタンの歴史に関する作品をもっと研究したいです。

私がポーランドに帰っても、ポーランドで留学する日本人の学生との交流など、ポーランドと日本の間で、架け橋をかける活動を続けたいと思います。皆様、この一年間に、大変お世話になって、心の底から感謝いたします。皆様の支援のおかげで、日本語と日本文化を勉強したり、色々な旅行をしたり、論文の資料を集めたりすることができて、非常に有意義な一年を過ごしました。留学の思い出は、私の人生の果てまで、必ず大事にします。皆様、誠にありがとうございました。

「ハリウォ・ヤクブ君と教会」

金　子　淳　子

今年の八月末、留学を終え帰国されたヤクブ君は、その間、皆勤賞をあげたい位、私の通う六甲カトリック教会の日曜のミサにやって来ていた。

一昨年の１０月、将に彼が関空到着した折、出迎えに行かれた河合さん他、岸本さんなどの車と前任のゴシャさんからの引き継ぎの荷物を積んだ私の車が落ち合ったのが、六甲教会の藤棚の下で、見知らぬ車が教会へ入ってきたので、主任神父のアルベルトさんが飛び出して来られ、そこで「初めまして」と挨拶を交わし、日本語の達者な神父の質問に対し、その時の彼の日本語は少々重かった。いつもの国維寮だとばかり思っていたのが、神大の住吉の山手にある国際寮だということで、そこからうろ覚えのカーブの多い坂道を登りつめた所にある寮へ送り込んだことを覚えている。

これまで何人か神戸大学で学ぶポーランドからの留学生を知っているが、神父に優しく声を掛けられたからでもなく、ヤクブ君の自らの意思で、日曜日欠かさずミサに来るようになり、信徒の行列に混じって、180ｃｍの長身の彼は、頭ひとつ出ているので、遠い席からも一目瞭然で安否確認に留まらず、教会員の人々にとっても熱心に祈っている彼の姿は、心打つものがあり、「ヤコブ君」、「ヤコブさん」と親しく声を掛けてもらっていた。

イノシシの出没する山から、徒歩で１時間以上かかる道のりを通って来ていた。時には、簡単な昼食を共にすることもあったが、殆どの日は、寮に戻って修士論文に必要な日本語の隠れキリシタンの本を読むと言って、帰りは同じ方向の車で来ている方たちに乗せて貰って帰っていた。

教会の人たちからも、会う人ごとに「長崎に行くといい」と言われ、彼もその気になっている時、彼に長崎行きのチャンスが訪れた。我が家の遠縁の元・朝日新聞のジャーナリストの優香里さんとそのパートナーと３人して、ヤクブ君の行きたいと思っている所へ行こう、という話が持ち上がり、案内役のお二人が東京から、ヤクブ君は神戸空港より飛行機で向かい、現地で落ち合い、キリシタンの歴史に触れることが出来たのはきっと彼の論文にも良き成果をもたらすであろうと思われる。

私はその長崎行きの話を、教会の７０歳以上の人たちの会（メンバーが多くパワフルな会）で、彼が講師役を果たし、「私は長崎で、生まれて初めて鯨の刺身を食べました」等、楽しい旅の話と彼のふる里オポーレの話を聞かせて貰った。その後も、「東京へオペラを観に行く」と言われるので、よく聞けば遠藤周作の「沈黙」というオペラが上演されるのを観にいくと楽しみにしているので、その折も優香里さんたちに、宿泊から案内もして貰え、効率よく東京見物が出来たようだった。行き帰りも富士山の見える座席に座ったのに、生憎、見えなかったと残念がられていたが、教会の人たちが「もう一度、是非見に来るように」と、彼に本気で話していた。

これは夫の話によるのだが、ミサの後で外のベンチにヤクブ君と腰掛けて話していたら、教会の人がヤクブ君に話しかけてこられ、「あなたは神父になって私たちの所へまた来て欲しい」と言われると、彼が「それは神様の思し召しの侭です」と、優しく笑って即答したのを夫は聞いて、なんて素晴らしい日本語かと思ったそうだ。

彼の信仰篤い学究肌の真面目な人柄に触れた教会の多くの人たちが、今も私に「ヤコブさんはどうしているか？」と尋ねることがある。

「はじめまして」

クライニスカ・アグニエシカ

（神戸大学国際文化学部）

初めまして。私はクライニスカ・アグニエシカと申します。２３歳です。ワルシャワ大学の日本学科の修士課程の１年生です。去年の１０月１日に来日して、交換留学生として、神戸大学の国際文化学研究科で勉強しています。私はグルジョンツというポーランドの北のほうの町の生まれですが、　今はワルシャワ大学で勉強するためにワルシャワに住んでいます。専門は、日本の宗教と哲学です。

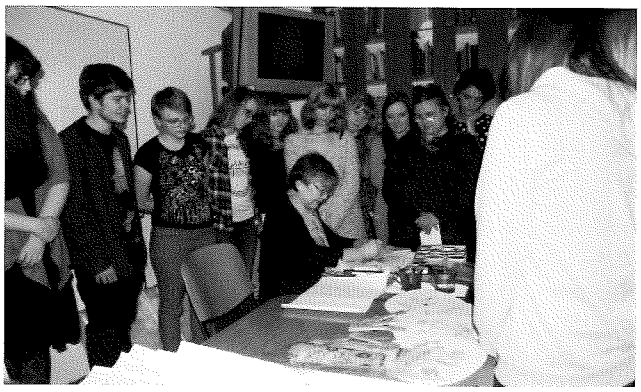
幼いころから日本の文化に興味を持っていました。日本学科に入学したきっかけは、日本語という美しくて面白い言語を勉強したかったからです。ヨーロッパの言語の中には、やっぱりポーランド語や英語と文法や単語などの点で似ているものが多いですが、私はまったく新しい言語を勉強をしたかったので日本学科に入学してみました。

ワルシャワ大学の日本学科のコジラ先生の宗教についての授業のおかげで、初めて神道と仏教に興味を持つようになりました。修士論文では「ニーチェと仏教との関係」について書きたいと思います。なぜなら私は高校のときに哲学の面白さがわかるようになったからです。初めて哲学について勉強し始めたのは、高校のポーランド語の先生のおかげです。その先生は高校の最初の一週間にクラスのみんなを全国的な哲学のコンクールに参加させました。論文を書くために準備をし始めると、哲学は思っていたよりも興味深いものだと気づきました。それだけでなく、哲学には人の意見や考え方を変える力があります。私の意見や考え方もずいぶん変わりました。その先生のおかげで、私はそのコンクールに３年間毎年出るようになりました。その時から哲学に興味を持つようになりました。ニーチェを今現在、私が熱中している日本文化と結びつけることができてとてもうれしいです。

私には興味がいろいろありますが、特に二つの大好きなものがあります。それはスケッチや水彩画の絵を描くことと、自然にふれることです。幼い時から自然などをたくさん描きました。中高の時短時間、絵を描く学校に良く行きました。しかし、時間が無くなって、高校の時描く事をやめました。けれど去年の冬に高校の時以来、初めて再び描き始めました。もう一度何かを描くのはよかったです。また、練習しようと思います。描くことだけでなく、私は自然が言葉で言えないほど好きです。ポーランドで、実家に帰るとき森で散歩することが大好きです。実家に帰ると、すぐ私の家の隣にある森に散歩に行きます。鳥が鳴くのを聞いたり、ゆっくり歩いたり、木を抱擁したりするとすぐ心が落ち着きます。シカや冬に白いダマシカをよく見ることもできてとても嬉しいです。

来日してから、日本人の方々は「日本に来てびっくりしたこと」という質問をよく聞かれます。実は日本文化、習慣、歴史などについて、ずっと４年間に必死に勉強しましたので、初めて来日したとき、あまりショックを受けませんでした。それから、今回の日本での滞在は３回目なので、ショックが小さかったのかなと思います。

今まで一番びっくりしたのはお正月の時です。クリスマスとお正月は日本とポーランドで祝い方が逆ということは知っていましたが、日本では真夜中に花火を挙げないと聞いて、ちょっとびっくりしました。一応日本での生活にも慣れたと言ってもいいと思いますが、今から少しびっくりすることは多分多く浮かぶかもしれません。今まで日ポ・サロンの方々のおかげで普通は得にくい経験ができました。落語、お餅つき人形浄瑠璃、様々な日本料理などを経験して、言葉で表せないほど感謝しております。
日ポ・サロンの方々のおかげで、今現在の私はすごい思い出をたくさん作れるので、まことにありがとうございます。



槇得さんの実演に魅入る学生さんたち

魅惑のポーランドとショパンを訪ねる旅

２０１５年１０月１５日（木）～２３日（木）
会員２４名＋２名（現地で合流）計２６名参加

「ワルシャワ旅行」

槇得　美智子

古より受け継がれて来ました四季折々の美しい言葉を織り込みながら絵手紙を描いています。

２００８年のワルシャワ大学・日本学科・秋祭学会「源氏物語千年紀」に、源氏物語の絵巻を描き、出展させて頂きました折りに、ご懇意にして頂いております山本乃婦子様のご紹介で、高島和子様とのお出逢いの機会を頂きました。その高島様が、ワルシャワ大学・日本学科に私の巻絵を展示して下さり、「５年後にポーランドに一緒に行きましょう。」とお誘い下さいました。高齢の私にとりましては、海外旅行は夢のようなお話でとても実現できるとは思ってもいませんでした。

世の中も人生も「無常迅速」・・・あっという間に時は過ぎ、この度、「日ポ・サロン」の皆様と旅行を共にさせて頂き、楽しく思い出多い日々でございました。とりわけ、ワルシャワ大学・日本学科の諸先生方をはじめ、学生さん達との交流会「一期一会」のお出逢いは、夢のようなひとときでございました。また、絵手紙を描く機会もお与え頂き、日本の文化を少しでもご紹介出来ればとの思いで、楽しく描かせて頂きました。学生さん達が興味深く見て下さり、心から嬉しく思いました。この経験は私にとりましては、一生の思い出であり、宝物となりました。そして「日ポ・サロン」の皆様からの「お土産」を大変喜んでおられたのが印象的でした。

高島様、河合様をはじめ、この度の旅行計画のお世話をして下さいました「日ポ・サロン」の関係者の皆様とワルシャワ大学・日本学科の皆様に心からお礼申し上げます。

そして、日本とポーランドの国際間の友好と交流が益々発展します様に、お祈り申し上げております。

“野菊咲く　この道真っすぐ　ショパンの生家（いえ）”みちこ

「懐庵でお茶を」

川　端　佳　子

私は今お茶席に居る。そしてポーランドに来ている。ここはワルシャワ大学日本語学科のお茶室「懐庵」。

日本学科の学生さんのお点前でお茶を戴いている。１０月秋のポーランド。「えっ、ここは日本でしょ！？」。

「懐庵」、なんて素晴らしいお茶室なんでしょう。ここはまるっきり日本でした。

腰掛待合、露地、手水鉢、蹲踞、小間の躙口、その上、突上窓までありました。本当に羨ましい限りのお茶室ではありませんか。奥深い教養と茶の心の高島和子女史と設計飯島氏の和の心の結晶が、ここポーランドで初で唯一のお茶室がありました。

日ポ交流の場である事さえ忘れて、只、茶筅の音に耳を澄ませていました。お茶がたち、一服戴くこの静寂の中に平和の有難さを感じずにはいられませんでした。茶碗の中に泡立つ緑の中に日本学科で学ぶ学生さんの日頃の精進と和の心がいっぱいでした。緑の泡が胃の中にゆっくり落ち着く頃、長旅の疲れもすっかり忘れて心も体もほっこり、ほっこり･･･

お名前も知らない学生さんを見ていると、かつて我が家でお稽古されたゴシャちゃんやマチェイ君の姿がダブって見えました。このお二人がいつも真摯な姿勢で取り組む眼差しは印象深く心に残っています。

お濃茶のお点前を初めてしました、と嬉しそうに話すゴシャちゃん。裂地の研究をしていた彼女にとって、お仕覆に包まれる茶入れの出し入れは初体験であり、裂地の由緒や紐結びを興味深くお稽古されていました。

素晴らしい日ポ交流の旅を本当にありがとうございました。

ワジンキ公園ショパン像前

「交換留学１３年」

影山純夫

私と日ポ・サロンの関係は、２００３年の秋に神戸大学とワルシャワ大学との交換留学のお話を日ポ・サロンから頂いたことに始まります。この件を神戸大学のなかでどのように進めたのか、確認するために手帳を繰ってみたのですが、手帳の記載がスカスカでほとんど記録されていません。ただ１２月４日に当時国際文化学部の留学制度担当であった坂本教授と相談したことをなぜか書いています。このことは特に重要だと私なりに感じていたのでしょうか。この件は、この月の留学生委員会にかけられ承認され、１月の教授会で承認されたのでしょう、２月１日にワルシャワ大学の岡崎先生にメールを送っています。

それからは、交換留学協定書の交換が円滑に進むはずでした。でもこれがなかなか進まなかったのです。国際文化学部の事務方も手薄で問題があったように思います。一方ワルシャワ大学の事務方もてきぱきとは仕事をなさらないようで、なかなか返事が返ってきませんでした。いらいらしながら返事を待つ日が続いたように記憶しています。それでもなんとか夏には協定を結ぶことができ、ワルシャワ大学の日本学科から派遣される学生も決めていただくことができました。

私はこの年の夏にドイツに遊びに行くことにしていたのでワルシャワ大学の様子を見ておくことも必要と、初めてポーランドへ足を踏み入れました。通訳を務めてくれたのは、いまワルシャワ大学の教員をしているアンナさんで、初めての留学生に内定していたアダさんとも会うことができました。彼女は素直であり日本語もよくできたので感心したのを覚えています。彼女は、留学後は文学部に留学していたヴェロニカさんと一緒に神戸大学の職員組合が開いていた書道教室にも加わってくれたため、私と接触する機会が多く、私にとって最も記憶に残る留学生になりました。

この夏は、ワルシャワ大学の図書館内に高島さんのご尽力により茶室を作っている時で、設計者の飯島さんとは旧知の間柄でしたので、色々と苦労話を聞くことができました。

コンクリートの建物内に、しかもかなり狭い所に茶室二室と露地、水屋を作るのですから大変だったと思います。この茶室が出来たために４年後に茶会と私の同僚の魚住和晃教授の書のパーフォーマンスを行うことができました。魚住教授がその時書いた書は今ワルシャワ大学の図書館に展示されています。

その後は日ポ・サロンのご支援により毎年１人のワルシャワ大学日本学科の学生が神戸大学にやってきますし、国際文化学部からも毎年１人くらいはワルシャワ大学に留学しています。ですから交換留学については順調に行われ、余り問題は無いように思いますが、気を揉む事は何度かありました。神戸大学からの留学生を推薦してもなかなか受け入れの許可がこないことがありましたし、留学生の学年が問題になることもありました。受け入れの許可が遅れる理由については、次のようなことがあるのだと想像しています。

ワルシャワ大学からの留学生については神戸大学では、国際文化学部で受け入れるのですが、ワルシャワ大学では神戸大学からの留学生の留学目的に合った学部で受け入れてくれるために、その判断と手続きのために時間がかかるのでしょう。

ワルシャワ大学　日本学科講義室

また神戸大学からの留学推薦が５～６月となり、ワルシャワ大学の夏休みにかかるということも関係があるのでしょう。

学年の問題とは次のようなことです。ワルシャワ大学では学部は３年、修士課程は２年（ヨーロッパの大学の一般的な学年制度だと思います）で、その間に日本の大学のような学部卒業・大学院入学という考え方はなく、ほとんどの学生が５年間続けて在籍するようです。そのためワルシャワ大学からは留学生として５年生を推薦してこられることもあり、厳密に言えば協定を結んだときの学部生の交換という協定内容に当てはまらなかったのです。この問題を解消するためには学部間と大学院間の協定とするほかありませんでした。そのことに気づいて協定を結びなおしたのが、７年ほど前のことでした。

私の退職後の状況については国際文化学部に確認することもありませんが、問題なく行われているようで一安心です。交換留学制度は、神戸大学では互いの学費を免除し、学習・研究の援助を行うということだったと思います。そのために受け入れの留学生の数はほぼ同じになり、かつ優れた学生を送るのが好ましいわけで、ワルシャワ大学留学希望者を増やしたかったのです。増えればその中から優れた留学生を選べるのですから。ですが国際文化学部の学生の留学目的の主が外国語の習得という点にあるようで、米豪の大学に比べワルシャワ大学留学の魅力はやや低かったと残念ながらいわざるをえません。在職中私は、ポーランドはヨーロッパ歴史上極めて重要な位置を占め、研究テーマも多いし親日的で過ごしやすいと宣伝し留学を勧めてきましたが、それほどの効果はありませんでした。今後学生がそのことに気づいてワルシャワ大学留学希望者が増えることを願っています。

さて、前回のポーランド訪問から大分たちましたが、日ポ・サロン恒例のポーランド旅行のお知らせをいただき、ショパンコンクールにも興味があるし、また暇もあるしで参加を決めました。

ポーランドについての驚きの第一は、飛行場が立派になっていたことで、ポーランドの経済的な発展を知らしめるものでした。経済的な発展は多数の人ができるだけ早く移動することを可能にすることを求めます。当然飛行機の利用客も増えているので、対応のためにワルシャワの中心から飛行場まで鉄道で繋ぐようにもなっていました。また、ワルシャワと主要都市を結ぶ高速列車の運行も始まっていました。

ポーランド旅行の目的の一つはワルシャワ大学日本学科訪問で、まず大学図書館で抹茶の接待を受け、続いて大学キャンパス内の日本学科の小講座室？で大勢の学生の歓待を受けました。

それほど狭い部屋ではなかったのですが学生でいっぱい、これも学生の全部ではないそうで、日本学科の人気の程がわかりました。研究室には日本関係の書籍がかなり揃っているのですが、手薄な分野があるようにも見えました。書籍の充実についてはいつか何らかのお手伝いができればと思っています。

目的のもう一つは、ショパンコンクールガラコンサートで期待していた日本人小林愛美さんの入賞が実現せず、ガラコンサートでの演奏もなく残念でした。彼女は山口県の出身、私も山口県関係者で期待していたのですが。そういえば岡崎先生も山口県出身でしたが、このことについては先生とお話しませんでした。

ポーランド国内観光も当然楽しみにしていました。ヴロツワフは初めて訪れた都市で、大学の華やかで美しい講堂には驚かされました。クラコフのヤギェウォ大学は１４世紀に創設されていますし、ワルシャワ大学も当然立派、ヨーロッパの大学の社会の中での存在価値評価がいかに高かったか、また今も高いかがよくわかります。日本の大学とは大分違うように感じます。食事でも、ヴロツワフの地下レストランで食べた何という名前か忘れましたがパンの中のシチューが一番印象に残っています。

私は皆さんと別れてからもマルボルク、グダンスク、ルブリン、ザモシチと巡りポーランドの秋を楽しんできました。チェコに近いだけにビールも美味しく、値段が安いこともあって（ただし空港内のビールはやたら高かった）相当飲んだように思います。またポーランドを訪れる時には、この美しい自然と安いビールが遺っていますように。

「魅惑のポーランドとショパンを訪ねる旅に参加して

堀尾　志津子

この企画を知ったのは、日ポ・サロン会員の松尾さんからでした。松尾さんとは、テニスや地域ボランティアなどでとても親しくしていただいております。今回の旅行は、パッケージツアーにはないポーランドの観光と現地交流会やショパン国際ピアノコンクール入賞者によるガラ・コンサート等とても魅力あるもので、広島在住の妹を誘って参加を決めました。

にわか会員の私達もワルシャワでの初日から学生との交流会でポーランドの方々と堪能な日本語で直接お話しすることができ、大変有意義な経験をしました。何よりも、日本に興味を持ち勉強している若者がいることが嬉しいですし、日本の文化の普及に励んでおられる先生方はもちろん、日ポ・サロンの皆さんの地道な努力が浸透していることに感動しました。たとえば、お茶室『懐庵』では、すっきりと和服を着こなした茶道の先生のお点前が見事でした。学生達からもちゃんと「おもてなし」を受けました。何度か注意されたにもかかわらず、お茶室を出る際に「にじり口」で頭をコツン！とやった３人目は私ですが（笑）。

印象深かったのは、小学生の時、母が買ってくれたキュリー夫人の偉人伝を読み、とても感銘を受けたその生家を見学できたことです。残念ながら生家は修復中でしたが、向かいの仮設の博物館の展示を見学することができました。その他、ショパン博物館をはじめ、ワジンキ公園などショパンにゆかりのある場所も見学できましたし、旅程にはなく諦めていたダ・ヴィンチの「白貂をだく貴婦人」を仮設展示とはいえ、クラクフのヴァヴェル城の中で鑑賞することができ、思わぬラッキーな出来事でした。巨大な地下美術・博物館ともいうべきヴェリチカ岩塩坑、１７世紀に完成したヤヴォル木造平和教会、クラクフやヴォロツロワフの旧市街、特に戦争により壊滅状態だったワルシャワを市民が復興復元した歴史地区などポーランドの人々が自国の文化を大切に守り、後世に伝えようとしていることが、ひしひしと感じられました。さらに、ヤヴォル教会でのパイプオルガンの生演奏やヴォロツロワフの大学構内の華麗なホールでショパンコンクールの受賞歴を持つピアニストの演奏など、歴史的価値の高い会場での特別演奏、日々盛りだくさんの企画であっという間の一週間でした。

ブロツワフ大学講堂（バロック式建築）“アウラ・レオポルディナ”にて

また戦後７０年という節目の年に、アウシュヴィッツ博物館とビルケナウを訪れることができました。テレビや映画、そして中学生の頃に読んだ「アンネの日記」等を通じて知識はあったものの現地に足を運ぶことには実はあまり乗り気ではありませんでした。そこでの出来事はあまりに悲惨なので怖かったのです。当日は、小雨の降る寒いどんよりとした天候でした。おそらく冬はもっと厳しい寒さの中、おびただしい数の人々が連行され、裸同然で家畜のような扱いを受け殺されていったのであろうと想像し、いたたまれぬ思いでした。没収されたあらゆる品の展示、ガス室焼却炉、絞首台収容者の部屋など、広い敷地内で限られた時間内で私達が見ることができたのは、その一部だけでしたが、巨大なゴミ処理場か殺人の工場のようでした。見学者のグループは他にも沢山あって、多くの人が次々と訪れていました。ヨーロッパ内からの見学者、特に若者たちが増加しているとの事です。博物館公認日本人ガイドの中谷さんからは、シリアの難民が大量にヨーロッパに押し寄せている一方で、人種差別や偏見、テロや戦争の危機は、ヨーロッパでは喫緊の問題であること何故見学者が増加しているのか、　ここで人類の負の遺産から何を学ぼうとしているのか、それらのことを考えてみて欲しいと課題を投げかけられました。広島市でも平和祈念資料館の来館者が年々増加しています。偶発的な事故や些細なきっかけで、世界中が戦争に巻き込まれかねない危機を感じ、過去から学び、平和の尊さを再認識しようとする人が増えているのではないでしょうか。

旅の終盤、クライマックスのコンサート当日、ヴォロツロワフからジェラゾヴァヴォラ経由でワルシャワのホテルまで長距離移動しました。早朝の出発だったので、予定では車中で寝てコンサートに備えることにしていましたが、つい他愛ないおしゃべりに

夢中になり寝そびれてしまいました。会場では幸運に恵まれとても良い席だったにもかかわらず、長いセレモニーの後、肝心の演奏になってからはあまりの美しい音色についウトウトと・・・いつの間にか意識が遠のき、ハッと気づいてしばらくは一生懸命聴いているつもりが・・・の繰り返しとなりました。テレビの中継画面に寝顔が映っていなかったことを祈ります。

日本人が忘れてしまっている丁寧な言葉遣いや気遣いをする反面、カメラを向けるとピースサインをするガイドのソニアさんはとてもチャーミングでした。ツアーのコーディネイトをして下さったアンナさんには“ありえへん”ほど整理整頓されたご自宅でポーランド伝統料理のピェロギ作りを披露ウォトカと一緒にふるまっていただきました。一般家庭にお邪魔するのはめったにないチャンスで、私達は好奇心の塊になってしまいましたが。お二人を含め、現地滞在中にお世話になった皆さんのお蔭で楽しく過ごすことができました。ご参加の皆様方には大変お世話になりました。特に理事長や幹事の皆様方の多大なご尽力に、心より感謝致します。

「2010年と2015年のポーランドの旅」

常田　じゅん子

一度は行ってみたいと思っていたショパンコンクールに二度も参加させていただきました。日本との温度差を気にしながらも、ワルシャワ・ショパン空港に降り立ち、素晴らしく整備された美しい空港の様変わりに驚かされました。

早速あくる日からキュリー夫人博物館、歩いて旧市街、ワジンキ公園と日本よりも一足早い秋の深まりを感じました。ユダヤ人歴史博物館、あまりにもユダヤ人の歴史が長く複雑で難しすぎる問題ですので、理解するのは無理ですが、私には難解な見学でした。

ワルシャワ大学に行き、お茶室『懐庵』でお茶を頂き、学生たちとの懇談の時間が随分と延びてしまったにもかかわらず、笑顔で待って頂き、私達が持参したお土産にも、絵手紙を書いて下さる槇得先生のデモンストレーションにも大変喜んでもらいました。

２０１０年の時は、ショパン生誕２００年ということもあり、その時の印象としては、もっとショパンの香りが一杯という感じで、街の中でもコンクールの模様のＣＤを配ったりと・・・でも、今回はそういった感じもありませんでした。

クラコフの旧市街も賑やかであったり、ヴェリチカの地下岩塩坑もきれいに整備され、地下の礼拝堂での写真撮影も料金が必要で、以前とは違う変化に少し驚かされました。一旅人としては、もっとレトロな感じを残してもらえたら・・・と、無理な要求だとは思いますが。

でも、秋の深まりの中、森の中の古城で昼食、クラクフで思いもかけないダ・ヴィンチの“白貂を抱く貴婦人”を見れたり、シェチェパンスキ・ミハウさんの演奏を聴けたりと盛りだくさんの旅でした。そしてこの旅の目的、ガラ・コンサート。残念ながら日本人の小林愛美さんの入賞はならず、演奏は聴けませんでしたが、ホールも２０１０年のオペラハウスと違い、シンフォニックホールと、ホットな感じの劇場で素晴らしい演奏を聴くことが出来ました。本当に本当に感激でした。　この旅行で色々準備をして下さった方々に改めてお礼申し上げます。

「ポーランド・ショパンコンクールの旅」

石　川　康　介

昨年の１０月の頭に「ショパンコンクールを聴きに、ポーランドのワルシャワに行きませんか」というお誘いを妻の友人から受けた。日ポ・サロンからの誘いだった。

しかし、出発は何と一週間後で返事は今日、明日までのうちにとの事。あまりにも突然な話。う～ん、しばし考えながら、ショパンコンクールのチケットなど、そう簡単に手に入るものではない！贅沢な話だ。かつてその話を聞いた時に「うらやましい」と思ったことを思い出し、迷っている場合じゃないと参加の方向に向けてギヤーチェンジ。まあなんとかなるやろ、バタバタで出かけることにした。

取り敢えず１０月１５日の朝、関空のフィンランド航空のチェックカウンターへ行った。早すぎたのか誰もいなくてスムーズにチェックインと座席確保を済ませた。日ポ・サロンのグループは総勢２４名、面識のある人は一人だけ、ナマのショパンコンクール聴きたさ一心で、初対面の人ばかりのグループへの飛び込み参加。歳をとって若い頃の人見知りが無くなっていたことに気づいた。

関空から出発、ヘルシンキで乗り換え、ワルシャワまでは機内の席も自分勝手に取ったものだから、日ポ・サロンのグループではないかという勘だけで、付かず離れずの状態でついて行った。

ヘルシンキ空港でワルシャワ行きの飛行機を待つ間、一人の日本人女性と話すとショパンコンクールに行くとのこと、切符は現地で「窓口に並んで買い求める」と言う。

凄い！　熱心な人はそこまでしてでも行くのだ、と感心した次第。そのコンクールの切符が既に確保されているのかと思うとまたワクワク。帰国の時に知ったことですが、ローマのレオナルド・ダ・ヴィンチ、パリのシャルル・ドゴールのようにワルシャワ空港はショパンの名前が冠されている。ポーランドとショパンとの強い絆が想像される。ポーランドのショパンか？ショパンのポーランドか？

以下、最後の最後にあるショパンコンクールに向けた、様々な見学、イベントがありましたが、印象に残った事を書かせて頂く。

〈ワルシャワ〉やっとワルシャワ空港で初めて、今回ご一緒する皆さんと合流してバスに乗りホテルへ向かいました。市街地に来てから、その昔に、建築史の教科書で見た旧ソヴィエト体制下にロシアで建てられたスターリン様式と同じ形態の「文化科学宮」なる建物が目に飛び込んできて「あぁ、ポーランドはずっとロシア支配下にあったのだ」と妙に実感したのがワルシャワの第一印象です。

２日目は昼間ワルシャワ旧市街の見学、ワジンキ公園、マダムキュリーの生家、王宮、ショパン博物館、ユダヤ人歴史博物館を見て回りました。印象に残っているのはユダヤ人歴史博物館で、その空間構成の巧みさに感心しました。設計者はフィンランド人建築家だそうで、招き入れるような大きなエントランスホールから、様々な展示室をへて、見学する者は最終的にかつてユダヤ人が居住し、生活をしていた正にその位置に導かれていく仕組みです。観覧者のルートは次第に狭められ当時の道の通りに複雑で、幅も狭められていく工夫

もされていました。

夕方に訪問したワルシャワ大学では、図書館内にある日本の伝統的茶室「懐庵」で、お点前を受け、お茶を頂いてから日本学科の学生さんとの懇談会に臨みました。日本の大学生にはないような初々しさが感じ取れました。日本から持参したお土産に学生さんが喜んでくれたり、サラサラと描く槇得美智子先生の絵のお手並みに拍手が起こったり、日ポ・サロンの方と旧知の方々もおられたりで、和気藹藹とした雰囲気でした。

図書館の建物ですが、帰国後調べてみると、ポーランドでは近年高等教育の施設建て替えが進み、大学に近代的な建築が建てられるようになったようです。ワルシャワ大学の図書館も現代的な建築で、壁面は緑色を基調とし、植物を絡ませた壁面緑化のバイオイメージの建物でした。屋上庭園もあるそうです。意外にもその建物の中に、本格的な日本の伝統的茶室「懐庵」が包み込まれるように存在していました。

一般的に庭園の木々に囲まれたり、庭に面している茶室と異なり、カラッとした透明感が感じられるのは建物内にあるためか、湿度そのものが低いためでしょうか、日本のそれとは異なる味わいがありました。少ない経験ですが、大山崎にある利休の「待庵」を思い出しました。

〈アウシュヴィッツ〉３日目は森の中での昼食後、アウシュヴィッツへと向かいました。食事した場所は深い森の木々に囲まれた、貴族が狩りの為に使用したという別荘で、黒色、茶褐色を基調とした木造の建物で、建物内には鹿の頭部を中心とした動物の剥製があちこちに配され（狩りの腕前の勲章らしい）、いかにも山中の隠れ家といった所だ。そこでのランチはまがい物ではない本物の西洋館の雰囲気を味わうことが出来た。イタリアなどの明るい南欧にはない景色でした。ポーランドへ行って「アウシュヴィッツだけは外せない！」。長年気になっていたアウシュヴィッツの施設を見学に連れて行ってもらいました。そこでは、これまで観てきたヒットラーやナチ、ユダヤ人虐殺などに関する物語、映画などが俄然現実味を帯びてよみがえってきました。特に第二収容所ビルケナウで物置棚のような木製ベッドを見た時は、イタリア人監督ロベルト・ベニーニの映画『Ｌｉｆｅ　ｉｓ　ｂｅａｕｔｉｆｕｌ』の様々な場面が次々と頭に浮かんできて、重い気持ちになりました。ただ一人の日本語公式ガイドの中谷剛さんが居られたことも施設理解の大きな助けとなりました。

因みに帰国後に某大手銀行の若い行員と話しをした時、「アウシュヴィッツって？・・・」と言われた時は愕然としました。コレ本当の話です。

〈クラクフ〉　４日目はポーランドの有名な古都。ホテル近くのヴァヴェル城へ。そこでのイタリアルネサンス様式の中庭は、ミラノのスフォルツア家から迎えた妃の為に造られたらしく、昔見て回ったイタリアの様々な宮殿の中庭を思い出しました。古城見学の最後の方で、本来チャルトリスキ美術館にあるダ・ヴィンチの「白貂を抱く貴婦人」の肖像画を偶然に、しかもほとんど囲いも無く、間近に観られたのもラッキーなことでした。旅行の２～３ヶ月前にダ・ヴィンチの加筆修正が新聞に出ていましたので、余計に興味深く見ることができました。その他、祝祭的な雰囲気を持つ歴史的地区の中の教会、かつての織物取引所などを取り囲む華やかで賑やかな広場での散策、有名なチョコレートラウンジで昼食をとったことも楽しい思い出です。早朝散歩の途中に行った古城前のテラスから眺めた、朝霧の中を流れるヴィスワ川も他では見ることのできない印象的な風景でした。

〈ブロツワフ〉４～５日目。この町の中央広場にある４～５階建ての建物は、オランダなど北欧に見られるような急勾配の屋根の妻側が広場に面していて、とんがった三角形を頂上にしたファザードを形成していた。元来多民族で形成されていると言われるポーランドですが、建物にもそれらの国の影響があるのでしょうか。総じてヨーロッパの古い石畳の凸凹のある道は足に応えますが、そこの広場の地面の話で、ガイドさんが言うには、ヒールでは歩きにくいと言う女性の意見を取り入れて「ハイヒール道路」と呼ばれるフラットな部分が作られたそうです。ナルホドね～。ここの町は人口約６３万人の内、学生が約２割占めるそうで、若い人の意見が採用されたのかも。その広場近くにあるヨーロッパで一、二を競う古いレストランでの昼食で食べた、お椀のようなパンに入ったきのこスープを忘れられません。加えてこの町の１００年記念ホールを観ることができたのは意外な収穫でした。この建物に関しては、近代建築史の写真集で見ていたのですが、不鮮明でよくわからなかったのです。かつて共産圏であったため資料が入手困難だったかも知れません。図面や模型から見て、５０年ほど前の大学生の卒業設計のような印象を持っていました。しかし実際に建っているのを見ると、図面で考えるのと大違いで迫力があり、建設時の苦労が忍ばれます。２０世紀初頭、その建設の技術的な工夫、特に鉄筋コンクリートの技術が評価されたそうで世界遺産にもなっています。おまけに何故か付属施設として日本庭園もあって、日本人としては痛快でした。

ブロツワフ郊外にあるヤヴォル平和教会は石、レンガ使用を禁止された制約の中で、木造モルタルで建てられたようですが、木造でありながら５階建てで巨大な内部空間を持つ教会建築にポーランド人の不屈の精神を感じました。

〈ショパンコンクール〉

旅の仕上げは１０月２１日のショパンコンクールガラコンサート。夕食を早めに済ませ、ワルシャワ・フィルハーモニー・コンサートホールへと向かった。ホールはもちろん着飾った人々で満員。夜の７時から前半は結果発表のセレモニーで、後半は入賞者の披露演奏でした。　セレモニーは長かった。大統領ご臨席の中、審査員はもちろん、コンサートに関係する機関の代表者各位の紹介と幾つかのスピーチ、表彰式

などが続いた。ポーランド語に加え、英語での説明があったせいもあり饒舌に感じられた。　それだけ重要な国家的なイベントに位置づけられたコンサートであると言えるのでしょう。当夜、スピーチの中で誰かが「ピアノ音楽のオリンピックです」と言っていましたが言いえて妙。審査結果の詳細はネット、ＹｏｕＴｕｂｅなどで検索出来ますので書きませんが、コンクール第一位のチョ・ソンジンは、浜松国際、チャイコフスキー、ルビンシュタインピアノコンクールなど、数々のコンクールにおいて上位入賞する実力派のプレイヤーであることが帰国後判明、あの夜のアンコール曲「英雄ポロネーズ」の次第に盛り上げていくクレシェンド部分は今も耳に残っています。（彼はポロネーズ賞も受賞）

大学のオーケストラに属していた頃から、個人的にショパンやモーツアルトなどのロマンチックで甘美なメロディーを好んできましたが、今回ワルシャワ大学の日本語科の先生と話した時に「ショパンハ、ロマンチックデスカ？」と、やや鋭く否定的に言われて、音楽史上ではロマン派に位置づけられているショパンですが、ポーランドの人々にとっては、単にロマン派のジャンルに属する音楽家ではないのでしょう。「ピアノの詩人」というのも、欧米における詩人という「職業」の社会的地位の高さを考慮に入れる必要があるのかもしれません。自分にとって心地良い曲だけを選んで聴いているだけではね～。これからはショパンの聴き方を変えてみようと考えています。そのキッカケを与えてくれた今回のポーランドツアーに感謝しています。帰国してから４ヶ月弱、未だに時々ＹｏｕＴｕｂｅでショパンコンクールの余韻を楽しんでいます。

（蛇足）これまでヨーロッパ１０カ国ほど旅しましたが、みな個人旅行でしたので、荷物の移動と管理、移動手段の段取り、ホテル、食事の確保など大変でした。今回のツアー旅行の「楽（ラク）さ」は私にとって感動ものでした。

「４度目のショパンコンクール」

河　合　康　子

日ポ・サロンを立ち上げて今年で１６年目。その間にショパンコンクールへの旅を４回しました。ショパンコンクールは５年に１度、１５歳から３０歳までの若者のために開かれピアニストの世界への登竜門となっています。

昨年も１０月１５日から２３日まで４度目のショパンコンクールを含むポーランドツアーを企画しました。入賞者によるガラコンサートのチケットは５年前の旅行が終わった時に、ポーランドの旅行社プロフィーに３０枚頼んでいましたが、結局２５枚しか取れず、２５名のツアーになりました。いつも１週間の旅で最後の夜にコンサートを聴き、翌日その余韻を残しつつ帰国しています。

日本人には世界中のどの作曲家よりショパンが好きという人が多く、昨年３月に「錦秋ポーランドとショパンの旅」の案内を出すと、１０日以内に一杯になり、その後キャンセルが出ても直ぐに埋まり、参加者には困りません。

時差の関係で１５日の夜にワルシャワ着、翌１６日は市内見学をし、旅の一番の目的であるワルシャワ大学日本学科の見学と学生達との交流、お茶室でお茶を頂き、夜は晩餐会に大学の先生方を招待します。昨年は日本学科の先生全員が来て下さり、その中には１５年前の留学生で現在は助教授や講師になった人達も居てとても嬉しく思いました。又、その全員が日ポ・サロンの名誉顧問である岡崎先生の教え子だそうです。先生はこの地でもう４０年も教鞭をとり、一人でも多くの学生を日本に行かせてやりたいと願いつつ働ける限り働きたいとのこと。私たちはその願いに答えて日ポ・サロンを創り、これまでに１４人の留学生を迎え、この４回のツアーで１００人の人をポーランドへ連れて行き、その皆さんがポーランドを好きになって会員になり、留学生を迎える力になって下さることに心より感謝しています。今年の参加者には６０歳代の人が多く、その人たちが次の世代の日ポ・サロンを支えて下さることを心より願っています。

profi tour TOUR OPERATOR
Profi-tour A.Jaworski
UI:Carnieckiego 1
53-650 Wroclaw Poiske-mail:profi@wr.onet.pl
e-mail:annaiandrze.i@gazeta.pl

「能装束寄贈の御礼」

曽根 勝 ・ 節子 様

ワルシャワ大学日本学科長
ゴズィラ・アグネシカ教授

この度は素晴らしい能装束を寄贈くださいまして、誠に有難うございました。心からお礼を申し上げます。毎年行われるワルシャワ大学における日本祭をはじめ、様々な機会を利用して頂いた能装束を展示したいと思います。それだけではなく緑蘭会という組織に貸し出しという形で能装束を譲りたいと思っております

緑蘭会（Ｒｙｏｋｕｒａｎｋａｉ　Ｐｏｌｓｋａ　Ｇｒｕｐａ　Ｎｏ）というのは、ポーランド人を中心として２００９年に設立された能を学ぶグループで、日本学科に講師として勤める藤井カルポルク陽子が責任者の一人になっています。日本の伝統芸能である能の実技（仕舞と謡曲）を学ぶ事によって、ポーランド人と日本人の間に豊かな交流をもたらし、文化理解の架け橋を築くことを目指しています。このグループは１９９９年より、喜多流能楽師の松井彬先生の指導を受け仕舞と謡曲のみならず、ポーランドでの能公演も実現させてきました。２０１２年より、観世流銕仙会の観世銕之丞先生をはじめとする能楽師の方々の来訪もあり、現在は仕舞と謡曲だけでなく、観世流小鼓方の鳥山直也先生の指導のもと小鼓も学んでいます。

ご寄贈いただいた能装束は大切に保管しながら、ポーランドにおける能の普及のために活用させていただきたく存じます。

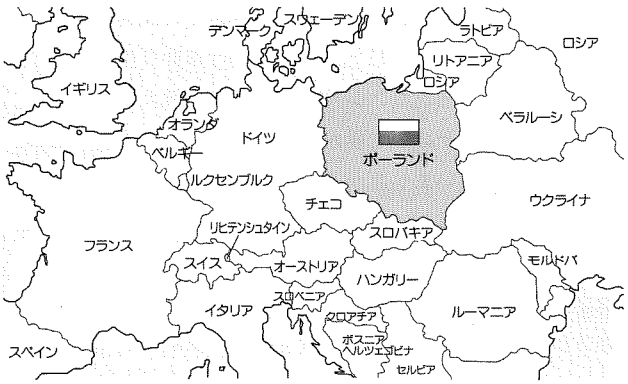
今後とも、ご指導ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。御健康と御多幸をお祈りいたします。

Kierownik Zakładu Japonistyki i Koreanistyki
Wydziału Orientalistycznego UW
prof. dr hab. Agnieszka Kozyra

寄贈された能装束　衣裳は砧（きぬた）、三井寺という演目で中年女性が着るもの

関西在住日ポ・サロン後援留学生（2015年度）

ヤヌシュ・ミトコ	京都大学文学部大学院文学研究科
マルチン・タタルチュク	京都大学文学部大学院現代文学科
佐々木・ボグナ・ヤンコフスカ	京都大学ポーランド講座講師
アガタ・ヴェルボウスカ	神戸大学経済学部大学院
ハリウオ・ヤクブ・マレタ	神戸大学国際文化学部
アグニエシカ・クライニスカ	神戸大学国際文化学部
ユリア・ブライスナル	立命館大学国際学部



特定非営利活動法人　日ポ・サロン

http://nipposalon.org/

お子様のお誕生おめでとうございます

原ユスティナさん（大阪在住）　次男　玲音（レオン）ちゃん
片岡カロリナさん（京都在住）　長男　直樹（ナオキ）ちゃん
佐々木モニカさん（東京在住）　長女　華恵（ハナエ）ちゃん

日ポ・サロン後援留学生だった女性の皆さんが
ただ今、育児奮闘中!!

＜ 編集後記 ＞

日ポ・サロン第１６号を皆様のお力添えのもと、無事お届けできることを感謝いたしております。

また、これまでの日ポ・サロン後援留学生の皆さんが、それぞれの分野でご活躍されており、お子様の誕生などのうれしいお知らせを聞かせていただく度に、日本とポーランドとの友好が波紋のように広がりを見せ、小さな架け橋の誕生と共に大きなチカラを頂くような嬉しい気持ちでいっぱいです。

本号をお読みになっての感想や原稿をお寄せください。

事務局担当　　岸 本 啓 子